

換喩・物語性・イデオロギー

——認知物語論のコミュニケーション観から——

西田谷 洋

1 はじめに

認知物語論とは認知言語学を理論ベースとする物語論を指している。本稿では、この認知物語論の観点から物語コミュニケーションについて素描しつつ、そこから派生するいくつかの問題について考察してみたい。

というのは、日本近代文学研究において、ポスト構造主義と批判理論を止揚する形で文化研究が展開され、歴史的・社会的な事象・出来事の批評的・分析的な対象化がなされている。こうした事象に対して認知アプローチはどう捉え返すことができるのか。それは、物語コミュニケーション論として展開されるべきなのか、といった問いでもある。

本稿では、まず認知物語論の理論的概要を整理し、そのコミュニケーション観を提示する。その際に、認知主体の先行性やその他の理論的限界点、すなわち拡張・節合のポイントを指摘する。とりわけ認知理論の実用性の点で解決しなければならないのは社会的・歴史的な事象の対象化の問題である。その際、理論的作業を隠喩的、社会的事象・テキスト解釈を換喩的と区別する見解がある。だが、社会的事象を扱うのは換喩に限定されるのか、また隠喩と換喩は対立で捉えられるべきなのか。ロマン・ヤコブソンの古典的な隠喩・換喩観は修正されなければならない。また、1990年代には、物語論を歴史的・社会的事象分析に適用することが求められたが、歴史的・社会的事象を物語として図式化することの問題点を確認したい。さらに今日での歴史的・社会的事象分析の代表的アプローチである文化研究、アイデンティティ・スタディーズの理論構造を図式化し、認知言語学の発想からその問題点を考察する。

このように、本稿で、認知物語論のコミュニケーション観から始められた理論的検討は、最終的には物語論や狭義の認知言語学の枠組みから逸脱、発展していくことになる。学界動向において主流のアプローチを検証すること、しかし、自らの依拠する方法論の無謬性を前提とするのではなく常に疑うこと、安直な物語化に対して抗しつつ検討を進めること、本稿が物語コミュニケーションの問題を再考するにあたり選んだ方略は、以上のような配慮のもとに採用されている。

2 認知物語論の射程

認知物語論は、テキストとその背後の言語主体の認知メカニズムの相互関係をダイナ

ミックに捉えていく認知言語学的な発想を採用した物語論だ。

認知言語学は、人の認知メカニズム（推論、思考、判断、知覚、記憶、連想等）の解明を探求する認知科学のパラダイムを背景とし、意味構造が依拠する文脈は言語外に位置し、意味とは知識や信念の型に埋め込まれた認知構造だとする立場をとる。この場合、認知とは、単にある対象を認識するプロセスではなく、世界の主体的な解釈と意味づけ、世界のカテゴリー化と拡張、環境・社会との相互作用、五感、空間認知、運動感覚を始めとする身体的な経験に根ざす、広義の一般的な認知能力を指す。このため、認知言語学は、一般認知能力に基づき、例えば身体経験を通じた環境との相互作用によって、具体的な言語運用がなされ、そこから抽出・拡張される概念メタファーやスキーマが言語表現に反映されるとするアプローチを採用する。

認知物語論の場合も、テキストを文学製作・受容者の認知過程の中で生成される認知現象と規定することで、柔軟かつ創造的な情報処理を可能とするテキストとその背後に存在する認知主体の認識プロセスの相互関係を明らかにするアプローチを採用する¹⁾。そこでは、物語テキストの形式と意味が、認知主体のどのような認知的制約に動機付けられているのかという問いがなされる。

物語コミュニケーションのモデルとしては、認知主体間で物語コミュニケーションがなされると仮定する。ただし、直ちに補足しなければならないのは、認知主体を、根元的な主体である作者／読者とのみ規定すれば、認知主体と物語世界の出来事との直接的な相互行為が存在することになり、それは物語現象を単純化しすぎてしまうことになる。そこで、物語テキストの認知主体を根元的主体とテキスト内の焦点化子の二つのレベルで捉える。このことによって、認知主体である話者が同じく認知主体である受け手に向けて事象・出来事を伝達する際に、有意味性を任意のレベルで最適化しようとするテキストが修辭的に組織化され、心的過程における推論によってテキストが理解されるという過程を明らかにできる。物語表現、物語世界との関係から図式化すれば、物語伝達の中で物語表現はテキストとして起動し、その物語表現によって物語世界が制作されるという構図となる。こうした物語コミュニケーションの観点から、物語世界、物語表現の構築を整理する。

これは確固たる物語世界が物語表現として具現化される前に存在することを意味しない。予め物語世界が存在しているというよりは、むしろ、物語状況における語り手の社会的・対人的な役割、語り手の発話態度、視点の操作、修辭的な言語使用といった非命題的な物語表現に焦点が置かれる方が、実際の物語産出においては多いと考える。テキストの一部の要素だけが中心的な制作対象となり、その文レベルにおける他の要素は制作に際して重視されない場合もある。

i) 物語世界

したがって、作中人物の活動する物語世界の創出も、概念隠喩の連鎖²⁾や心的空間の写像・融合、すなわち物語を別な物語に投影する機能及びその結果としての新たな物語

である寓喩³⁾によってなされると考える⁴⁾。この観点は、抽象度の低いスキーマが指示する内容は不十分であるため、そこから作り出される物語世界は、必然的に様々な状況・文脈の情報を関連づけることで多義的となるというテキスト解釈の実態とも呼応する。

ii) 物語表現

物語表現には認知主体の物語世界の事象把握／事象構築の認知プロセスが反映している。物語世界の認知は、予め存在する物語世界を受け取ることではない。物体を見る視点を変えると物体の形がそれに応じて変化するように、認知主体と物語世界との相互作用の中で認知主体が心の中に物語世界のイメージを作り上げるということだ。そうした認知プロセスとして、物語世界に視線を投げ掛け視線を移動していくスキヤニングをあげることができる。スキヤニングの際に使用しているのは、ある対象（参照点）を探索のための手がかりとして参照しながら、ターゲットに到達していく参照点能力だ。

この事象把握／表象の問題系は物語の視点論の問題でもある。ここで、視点を、視覚性に限定されないあらゆる知覚・心理の認識＝表現の装置、参照点を、主体が認知する認知領域内部の基準点として視覚レベルでは視点が採用した物語世界のフレーム内で作用する視覚的認知作用の基準点と定義する。いわゆる語り手や登場人物の視点移動を参照点である焦点化子が心的経路を移動する現象と捉えるならば、話者に帰属する視点が参照点を制御することで物語表現が作られると考えられる。

また、物語表現のアスペクト・時制作において働いている認知能力は、概念構造の低位構造に注意を向け、図／地をあてはめる力だ。ただし、人の情報処理は均質ではないため、図／地の適用には濃淡が発生する。物語表現の前景・背景が、必ずしも一定ではなく、段階性を持つ重層的なグラデュエーションであるのはこのためだ。

iii) 物語の意味

しかし、認知物語論が依拠する認知言語学は、個体の持つ能力の源泉を主としてその個体の内部に求める個体能力主義の立場をとる。これに対し、社会構築主義では、能力の源を個体と外部の相互作用、あるいは個体の内部と外部の区別を廃した環境全体に求める。この両者の理論的対立を解消・止揚し、認知主体が社会的・言語的な相互交渉の中で構築されたものであるという観点を確保しておく必要がある。すなわち、物語テキストの意味は、抽象化と拡張のダイナミックな相互作用の中で作成される。この場合、物語テキストと認知主体のフレームとの相互作用によって、物語状況に応じてテキストのネットワーク間のある部分が焦点化されて、テキストの意味を把握／提示／受容することになる。これは、物語テキスト生成／受容の規則・慣習を、一般的なカテゴリー化能力によるスキーマとして捉え、言語運用の状況に応じて変容していくものとして、そのメカニズムの動態を初めて説明する理論的根拠を与えてくれる。要するに、物語構造は認知と同じく主観的でありつつ、論理的・客観的な存在だ。

iv) 社会と物語

ただし、物語の細部の様式を文化現象と捉えたとき、文化現象があらゆる言語・共同体で同一とは想定できない。このため、物語と認知の間に環境を組み込んだネットワーク・システムによって、そのダイナミズムを捉える必要性が生じてくる。相互作用の行為体である話者や読者・作者は、物語外部の社会環境の転換子として、無数の意味のネットワーク上の結節点であり、物語表現と物語内容を構造化する機能体に他ならない。そして認知主体の心的現象は個々の分析者の局所性に依存する点で、心は先行的に存在するのではなく、分析は局所的に限定される。心の内的起源性／社会的構築性とは、限定合理性の視点、分析者と対象との未分離等を特徴とする内部観測が導き出した局所的な文脈において、それぞれ正当とされる限定的かつ無根拠的な観測＝行為に他ならない。

さて、ここまでの整理で分かるように、認知物語論とは、物語テキストを、単に認知言語学をもとに解析していただくだけではない。認知言語学の問題点は、個体の持つ能力の源泉を主としてその個体の内部に求める個体能力主義にある。したがって、認知物語論では、能力の源を個体と外部の相互作用、あるいは個体の内部と外部の区別を廃した環境全体に求める、社会構築主義との理論的対立を解消・止揚し、認知主体が社会的・言語的な相互交渉の中で構築されたという観点を確保した。

一方で、認知物語論は、文学研究の主流である文化研究やアイデンティティ・スタディーズとの理論的対話を行う必要がある。それらの理論的基盤から検討し、また物語コミュニケーションで社会的事象を捉える観点等の問題点を検討しなければならない。

3 隠喩と換喩の相互浸透

社会的・歴史的事象の分析モデルの検討の前に再考しなければならないのは、言語論的転回の視座に立つ比喩観だ。

周知のように、言語論的転回は、構造主義によって招来された、言語によって概念や事物が作られるという立場だ。比喩は概念・事物の形象化に関与する限りで、世界観や対象へのアプローチを規定する理論装置とされた。構造主義の代表的比喩観によれば、要素を別の要素と置換する隠喩は類似性に基づく範列的關係の性質を持ち、要素を結合して連鎖にする換喩は隣接性に基づく統辞的關係の性質を持つとされる。ロマン・ヤコブソンは、「換喩と隠喩の両手法の間の拮抗は、個人内であれ社会的であれ、あらゆる象徴過程に明らかに見られる⁽⁶⁾」と人間の発想様式を二類型化し、(1)に見られるように、隠喩はロマン主義様式すなわち詩の、換喩は写実主義様式すなわち散文の表現と発想様式に使用されると主張した。

(1a) をみなごに花びらがなれ／をみなびしめやかに語らひあゆみ (略) み寺の春
をすぎゆくなり (三好達治「整のうへ」)

(1b) 道は凍っていた。村は寒気の底に沈んでいた (川端康成「雪国」)

詩(1a)ではく女性は花である」という隠喩によって、本文中の、「をみなご」と「花びら」が結びつけられ、女たちの歩んでいく姿に風によって舞う花びらが重ねられ

ている。散文(1b)では、「村」という換喩によって、本文外の、村の構成員である村人や雪国の様子といった村の雰囲気全体を含意させている。このように、ヤーコブソンは、文化の種類や作家の様式をレトリックの類型論として展開する道を開いたと言える。

本節では、その思考実験に対する検証を行うことを目的とする。例えば、ここから、物語論等のテキスト内的なアプローチを隠喩的アプローチ、文化研究等のテキスト外的なアプローチを換喩的アプローチとして、研究の手法を極端に類型化してしまうかもしれない。換喩が構成要素の配置における空間的もしくは時間的な隣接関係を扱うとするなら、歴史的・社会的事象を対象化するアプローチは、歴史的・社会的事象をテキスト／考察に「隣接」する要素として捉えると言えるだろう。

だが、こうした類型論は余りに強引に思われる。例えば、中村三春氏は、詩／散文の様式において提喩／換喩という分類の記述は「極度の還元主義を免れまい⁽⁶⁾」と指摘する。テキストにおいて隠喩と換喩はジャンル毎に厳密に区分されて属しているわけではなく、混合しており、その比率はテキストないしテキストの切片毎に異なる。

さらに言えば、隠喩と換喩は対立関係にあるのだろうか。そもそもヤーコブソンの比喩観に問題があることは以前から指摘されていた⁽⁷⁾。

例えば、瀬戸賢一氏は、ジグムント・フロイトの精神分析の操作概念に対するヤーコブソンの比喩的類型化の処理からその欠陥を明らかにしている⁽⁸⁾。精神分析の主要操作概念には圧縮・象徴・移動・矛盾がある⁽⁹⁾。このうち、圧縮は潜在的な夢思想の中からある要素を選択し顕在的な夢内容とする操作であり⁽¹⁰⁾、移動はそれぞれ別の中心点を持つ夢思想と夢内容とが結びつけられ、その要素の比重が変化する操作となる。この場合、圧縮は多方面への連想を意味し、換喩あるいは隠喩といった特定の比喩に限定することはできない。また、移動も同様に特定の比喩とは結びつかない。

しかし、ヤーコブソンは、「隣接性は、メトニミーに相当するフロイトの「移動」とシネドキに相当する「圧縮」に、類似性は、フロイトの「同化」と「象徴」に相当する⁽¹¹⁾」と一義的に概念と比喩とを結びつける。ヤーコブソンは、提喩を換喩の一種として捉えており、換喩は圧縮・移動に対応すると考えていることになる。だが、既に見たとおり、こうした対応付けは成り立たない。

また、瀬戸氏は、ヤーコブソンの隣接性概念を①連辞関係②接触③構文構成能力④現実世界における隣接⑤類似性⑥意味世界における隣接の六種類の用法に区分し、①・③を語の連鎖、②・④は現実世界、⑤・⑥は意味世界に関連すると整理し⁽¹²⁾、類似性概念も同様の多義性を持ち、「一組の用語にこれほど異質な意味を盛り込めれば、ほとんどどんな対象を持って来ても、たちまちに意図する二分法で割り切ることができる⁽¹³⁾」と指摘し、隠喩／換喩の対立による二元論を実際の解析格子としては無効だと批判する。

認知意味論の観点から、あらためて隠喩と換喩を規定すれば、隠喩を類似性・共起性による領域間写像であり、換喩を概念的近接性による参照点構造として規定できる。こ

の場合、隠喩と換喩とは対立しあう関係ではなく、両者は重なり合い連続した曖昧な関係を作り上げる。

そこで、カテゴリーがその属性を表すという換喩について検討する。カテゴリーを属性の集合とみなし、カテゴリーと属性の関係を全体／部分の関係として捉えられるからだ。しかし、この種の属性を利用した表現は隠喩・換喩いずれかは曖昧になることが多い。

(2a) 彼は第二の中村三春だ

(2b) でも花枝さんがいまさら母親するのは嫌ですね（「年下の男」http://www.tbs.co.jp/t-otoko/bbs_read_09_1.html 2003.12.29閲覧）

(2c) 一時期「ホシノ・ルリは綾波レイの二番煎じだ」と言われてた（「Riniの掲示板」<http://www.ne.jp/asahi/chibiusa/rini/bbs/a501-550.htm> 2004.1.27閲覧）

(2a) は著名人の名前によってその人に特徴的な属性を表す換喩だ。「第二の中村三春」は中村三春の属性である「卓越した知性」を持つことになる。一方で (2a) は隠喩でもある。「あたかも～のようだ」という隠喩判定法を使用すれば、「彼はあたかも第二の中村三春のようだ」として構文化され、「第二の中村三春」は中村三春との類似性によって結びつけられる。また、動詞にかかわる表現 (2b) は、「母親」が行うべき行為（子供を育てる、子供と遊ぶ）のうちの一つを意味している。行為的な属性の集合から特徴的な一つを指示する点で (2b) は換喩となる。その一方で、(2b) は実際に母親ではない人がその日だけ母親らしくふるまい、その役割を果たしたと解釈すれば「母親」との類似性による隠喩となる。そもそも、よく考えてみれば気づくことだが、類似性の概念自体が一種の隣接性だと捉えることもできる。「AとBが似ている」は「AとBとが近い」ことを含意するのだ。(2c) は、無表情・銀髪・美少女といった属性を介在することを前提として、ルリとレイが近接した関係にあることを利用した換喩でもあり、類似性が属性を介在させた隣接関係であることを示している。こうした隠喩と換喩の連続性を示す事例を見ると、換喩的推論と比喩的推論は、相互排他的でなく相補的^[11]であり、隠喩と換喩を対立として捉える見方は正しくない。

これは認知言語学での隠喩観が領域間の写像、起点領域と目標領域との間に対応関係を結ぶことで成立しているためだ。この場合の隠喩は、「類似性だけではなく、共起性にも基づいている^[12]」ことになる。

(3) プライマリー・メタファー：愛情は温かさである

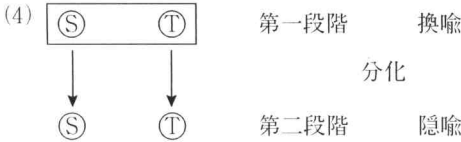
本文：ツールは心底うれしそうに言った。キラの胸にあたたかいものがあふれる。

（後藤リウ『機動戦士ガンダムSEED 1』）

原初的経験：愛情をもって抱かれている時に温かさを感じる

(3) での、この隠喩は、経験の共起性に基づき換喩的な隣接性に基盤がある。人間の発達段階の初期では経験は合併していると想定される。この時、プライマリー・メタファーの起点領域Sと目標領域Tは混沌とした未分化の一つの経験だ。(4) に見るように、

この第一段階では隠喩的な写像はなく換喩と言えよう。だが第二段階で、別々の概念領域に区別されたとき、愛情があることと温度が上がることは、量が増えることと嵩が上がることは、別の種類の認識なのだという認識が生じたとき、写像が成立し、隠喩となる。



隠喩と換喩を規定するとされた類似性と近接性は概念的に連動している。なぜ両者が類似していると判断できるのかは両者が近いからであり、隣接が分かるのかはそれらが類似しているからだ。

このように捉えるとき、隠喩と換喩の対立という言語論的転回の主流の発想、さらには本節で思考実験として想定したような文化研究やアイデンティティ・スタディーズによる対象の把握が換喩でなされ隠喩では困難だといった見解は廃棄されることになる。

4 歴史的・社会的事象と物語論

物語論がテキストに対して取ってきたスタンスは二つある。一つは、テキストをそれ自体充足したものとして捉えるアプローチ、もう一つはテキストはそれ自体では充足しないとして歴史的・社会的コンテクストの中で捉えるアプローチだ。藤森清氏は、前者はテキスト解釈の多様性を競う「文芸復興」になるのに対し、後者は文学（研究）が政治性・イデオロギーとの不可分な関係の中で成立していることを問題化する契機となると指摘する¹⁶⁾。

もともと、小森陽氏が主導したテキスト論（＝語り論）は、ヤーコブソンの対称性コードモデルに基づき、物語コミュニケーションの回路の中で、相互に関連する他のテキストとの交渉によってテキストの意味性を抽出するものであった。その入れ子型モデルは究極的には作者から読者に至るメッセージの伝達としてテキストを捉えると共に、その際のメッセージ内容は他ならぬ分析者のそれが投影されるという構図であった。

一方、小方孝氏の拡張文学理論すなわち計算論物語論の場合、語り手と聴き手のコミュニケーションが仮想的であれ成立している物語コミュニケーション状況を、①語り手と聴き手の第一次物語状況、②仮想的な語り手と仮想的な聴き手の第二次物語状況、③現実に存在する語り手と聴き手の第三次物語状況、④広告・流通に関与する語り手と聴き手の第四次物語状況に階層構造化する¹⁷⁾。

この階層構造モデルも、小森モデルと同様に媒介の透明性を前提としている。また、モデルの①～④のうち、テキスト内及びテキストに直接連なる相同的な伝達構造である①～③の水準と、テキストをめぐる評価・力の動きである④の水準とは異質な領域に位置しているように思われる。しかしながら、テキストの制作・伝達・受容のプロセスと

テキストに対する多様な加工のプロセスを繋ぎ合わせることで、主体がネットワークの網の目の中から立ち現れる存在・機能であることを見出す可能性を同じく持つことになる。

具体的な事例として、小方氏がモデル化したのは、生産者・受容者・場からなる芸能情報システムだ¹¹⁸。むろん、このモデルは、スクリプトが固定的であり、現時点では成功・流行といった実際の変動に対して後追いにしかならないと思われる。ただし、個々の構成素のフィードバック・相互作用を組み込んだネットワーク・モデルとして発展させようと言えるかもしれない

藤森氏の立論に戻れば、氏はテキストと外部の社会的・歴史的な言説空間との関わりを把握すること、分析対象・方法論・研究主体を歴史化することを主張する。藤森氏が賞揚するのは、小森氏が見出す意味の現代性ではなく、意味の歴史性を仮説的に捉えていく試みだ。ただし、藤森氏は、解釈格子としての物語論の理論は不問に付したまま歴史化を行おうしている。結局それでは理論がドグマしてしまい、同一の理論パラダイムに基づくもう一つの意味の現代性を抽出してしまうのではないだろうか。氏自身のその後の研究活動から見ると、氏の「物語論の社会化・歴史化」とは氏自身の研究の方向性の歴史化・社会化への意志の表明にすぎない。このため、氏の関心からはずれた物語論への理論的検討は廃棄されてしまったのではないか。

この事態は、一方では、歴史的・社会的事象を対象化する理論装置としては、物語論は実は不適當だからではないだろうか。物語コミュニケーションとして歴史的・社会的事象を捉えることには一種の飛躍があり、物語論として展開することに強引さがあることは否めない。歴史的・社会的事象と物語とは同一ではないからだ。歴史的・社会的事象が物語として見える場合は、混沌とした事象から雑多な要素を排除し物語として整理したから可能となる。このように捉えたとき、概念図式の現代性を自覚化しなければ、そのアプローチの「歴史的・社会的」なあり方は望めない。

5 文化研究、アイデンティティ・スタディーズの理論構造

しかしながら、三・四節のみで言語論的転回に基づく歴史的・社会的アプローチをいなしとすれば、余りに不十分と言わざるを得ない。

歴史的・社会的事象をテキストとして捉えるとき、文化研究やアイデンティティ・スタディーズのアプローチは、本稿の当初の思考実験に基づくならば、次のように図式化される。

カルチュラル・スタディーズは、批判理論とポスト構造主義理論などの種々の理論と対象とを繋ぐ節合と、文化現象を構築する様々な制度への変革を求める介入を特徴とし、あるテキストがいかに受容されたかを問題とする。この枠組みは、アイデンティティ・スタディーズにも共通する。後者では「集団やコミュニティはもちろん、個をも単位としない解放、境界性をもたない解放¹¹⁹」を目指す。すなわち、解放とは「文化をつくり

かえていくことで、結果として、既存の構造を脱構築⁽²⁰⁾することは、前者の「自明視されている価値やアイデンティティに疑問符を与え、社会システムが見えなくしているリアリティの次元をあからさまにし、その言説や装置の配列を組み替えていくための実践⁽²¹⁾」と呼応する。さらに、その際の手続きとして、記号化可能な領域を表象テキストとして捉え、その中の一部である対象を論じることで、それがはらむ問題の全貌（の一部）を示唆する手法が採用される。すなわち、それらは、局部的なものを強調し、その検討の結果として、推測に基づき局部的なものの延長でもある理念的な全体性・完全体を導く。対象テキストは部分、把握されるべき意味・事態が全体というヤーコブソンの意味での換喩的構造をなしている。この場合の全体とは、体系の歴史性・政治性・倫理性・社会性や要素の意味・意義を指す。それは歴史や政治、文化を文学テキストのアイデンティティとして読むという読み方に他ならない。こうした全体性、アイデンティティは、表面にあらわれたテキストの中に込められていることが想定されている。

しかし、テキストから意味性や全体性の構築を行う換喩的な知には限界がある⁽²²⁾。というのは、テキストには、「不透明性の強度の高い部分、全体との間の関係が不明であるような部分⁽²³⁾」である断片が必ず含まれるからだ。中村三春氏はここから「言葉や表象は、十全な意味あるいはコミュニケーションという、ありうべき全体に対して、常に断片なのではないか⁽²⁴⁾」と問いかける。全体を復元しえぬ断片であるが故に、多様な解釈を誘発し、その解釈のいずれかがイデオロギー批判等の関連づけによって当座のヘゲモニーを握るが、断片の故に普遍的な支配性を確保できない。また、一方で、断片の解釈誘発性は通約しきれない不可解なものを切り捨てる啓蒙を招き寄せるため、日本近代文学研究で展開された文化研究は教条性を抱え込むことになった。中村氏は、カルチュラル・スタディーズを脱構築的に捉えることで、文化研究の限界点を提示する。また、これは、アイデンティティ・スタディーズにおいて、「アイデンティティの前提を拒否して、齟齬や非整合性や脱中心性などの概念の方を選びたい⁽²⁵⁾」とする理論動向とも軌を一にする。この場合、両者のアプローチにおいては、その故に、「使えるだけのさまざまな資料を使って、そこで作動しうるコードの複数性を拡大」し「常にある種の重層性とか複数性とか、その潜在的なチャンスを確認⁽²⁶⁾」することが目指される。鄭氏が、(5)「直流ではなく、交流のホメスオタシスが満ちる場で、私は佇んでいたい。小文字で複数形の"hiroshimas"には、差異をてこに越境する可能性がいくつも潜んでいる。錯綜しつつも出会いの交点を見出す場としてhiroshimasがあるかぎり、このまましばらく広島で私は〈遊び〉続け⁽²⁷⁾」ることを主張するのも同じ理論パラダイムの発想(6a)に属している故だ。

(6a)「諸矛盾」、その幾つかは根本的に異質であり、またすべてが同じ起源、同じ方向、適用の同じ水準を持つとはかぎらず、しかしながら「融合されて」一個の統一された破壊力となる⁽²⁸⁾

この問題をもう少し別の観点から再考してみよう。

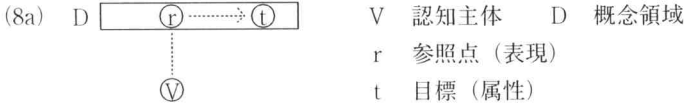
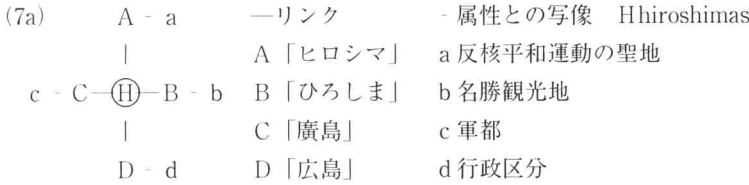
6 文化・イデオロギーの認知構造

言語外のコンテキスト情報なしではコミュニケーションは不可能だ。かつての構造主義が自律な記号体系として言語を捉えていたのに対し、文化研究は言語以外の要素を記号化して組み入れた非自律的な記号系として捉える。認知言語学も同様、言語以外の文化・社会を組み入れなくては成立しない言語観を採用している。また、文化研究は、言語が既に存在している現実をそのまま写すのではなく、言語使用によって現実が新たに構築されるという構築主義の視座を採用している。さらに、テキストが相互作用的な社会的行為であり、ダイナミックなコミュニケーションの過程において意味を形成することが強調されることになる⁽²⁰⁾。

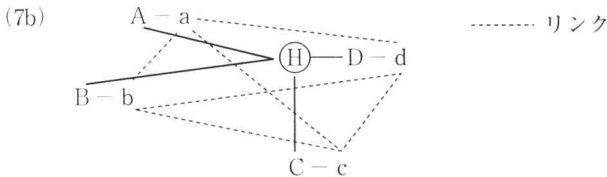
さて、言語論的転回以後、中立的な分析対象であった文化が、実は客観的な存在でなく、分析者やそうした人々を取り巻く制度が創りあげてきたイデオロギーであったという批判が頻繁になされるようになった。文化は実際にはもっと異種混交で、流動的で、不調和であるにもかかわらず、あたかも均一で不変的なものであるかのように強引に対象化してきた。このことに対する批判は正しい。だが、文化をイデオロギーとして捉えた時、それが先験的に、すなわち人の経験に先立って客観的実在としては存在しないという見解に到達する時、その立論は過剰解釈となる。なぜなら、「特定の人々が分かち合う特定のルールや共通の知識の体系がなければ、そもそも意味の解釈が成立しなくなってしま⁽²¹⁾」からだ。文学テキストにおいて、表現の意味・解釈の問題を考察するとき、コンテキストによっては曖昧性や多義性の要素はあるが、一方では、構築される意味に一定の規則性や予測可能性が含まれる時、概念体系ないし秩序ないし機構的な言語や文化の役割を軽視することはできない。

もともと人の認知能力には限界があり、複数の対象に同時に同じく注意を向けることは普通できない。焦点を当てる対象を選ばねばならない。その故に、「言語形式は、関連する領域におけるある特定の区域や相対的な配置を「輪郭づけ」て際立たせることによって意味を得る。輪郭づけは適切な「スキーマ」やスキーマ群によって領域に構造を与えることを意味する⁽²²⁾」といった見解は示唆に富んでいる。このため、従来、言語的意味と言語外的意味と関連し、百科事典的な意味に関わる換喩が重視された。換喩とは、1つの概念からそれと同じ概念領域内にある別の概念に心的アクセスをするという認知プロセスであり、概念の操作を行う点で概念換喩とみなされねばならない。すなわち、換喩が世界に係わるとは、換喩が概念的の世界に係わるということに他ならない。

鄭氏が、広島が多層性をめぐる人々の心性を指摘しつつ、反戦平和を叫びながら、同時に軍都広島を懐古することを「意識の断層⁽²³⁾」として捉えるのは、(7a)のような構図が想定されているからだ。換喩で作動しているのは参照点を探索のための手がかりとして参照しながらターゲットに到達していく参照点能力であり、それを(8a)にモデル化した。さて、(7a)では、それぞれの広島の側面が担う意味合いが換喩的な属性として位置づけられ、各々は相互に関連しないために「断層」として把握されることになる。



しかし、(7a) のような把握は正しいだろうか。三節で隠喩と換喩の相互浸透について見たが、むしろ、隠喩と換喩は区別される。その違いは、「メタファーが異なる認知モデル間の写像であるのに対して、メトニミーは単一の認知モデルの写像であるという点⁽³³⁾」にある。隠喩では関連づけられる2つの概念が別々の概念領域に属しているのに対し、換喩では関連づけられる2つの概念が同じ概念領域に属している。つまり、換喩では概念間の写像が起こらない⁽³⁴⁾。しかしながら、それが対立・拮抗するのではなく、相互に補い合っていると考えるべきだ。例えば、「政治は戦争である」という概念隠喩は、cとdの間にリンクを構築する。また、名勝観光地や軍都、行政区分であるが故に、戦争の悲惨さを示すことになり、aとb・c・dの間の関連が作られる。このようにして、鄭氏のモデル(7a)は(7b)に書き換えられる。



そもそも、換喩は、「ある言語表現の複数の用法が、単一の共有フレームを喚起しつつ、そのフレーム内の互いに異なる局面ないし段階を焦点化する現象⁽³⁵⁾」とも定義できる。あるものを焦点化・前景化するとき、「多くの場合、フレームの一つの構成要素を前景化することによって他の構成要素を背景に追いやるばかりではなく、それらの要素が完全に抑圧される」ことによって、「前景化は徐々にメトニミー的な拡張に変化⁽³⁶⁾」する。要するに、鄭氏の言う「意識の断層」は隠喩や関係性のネットワークを鄭氏自身が切断することで作成したものに他ならない。故に社会的・歴史的・政治的現象に切断線を入れることで見えてくるのは、一方で分析者の今日的な政治的課題に他ならないという事態だ。

認知言語学モデルの非社会性・非歴史性という通俗的誤解に対しても、(8a)の参照点推論モデルは、反論を提供できうる。なぜなら(8a)は、分析対象を参照点、見出される歴史的・社会的・政治的な意味・価値をターゲットとする分析モデルでもある。(8a)の「v → r → t」の各項に様々な濃淡のリンク網を関与させることで、認知主体、

研究対象、分析結果の各々を歴史化・社会化・政治化させる認知モデル（図化はしないが、これを（8b）と呼ぶ）は構築可能ではないか。

もともと比喩やカテゴリー化等の認知言語学の諸操作概念は、言語運用において作動する選択、強調、排除に関する慣習的ないし個別的パターンであり、そうしたパターンに基づいて言説さらに慣習が組織される。さらに、イデオロギーを「あらゆる表象および象徴体系の一局面を作り上げるもの⁽⁹⁷⁾」として規定する観点、表象や象徴が権力と資源の非対象的配分に組み入れられている限りにおいて、全ての意味生産に関わる概念図式をイデオロギーとして見なすことになる。あらゆる事象・出来事は本質的な意味を持たず、フレーム、スキーマそしてスクリプトによって分節化され意味づけられて認知＝表現される。その際、対象と文脈を含む認知環境における多様な焦点と焦点、図と地との関係、そしてそれらの全体においてイデオロギーが付与される。意味が付与される瞬間に事象・出来事はイデオロギー化する。

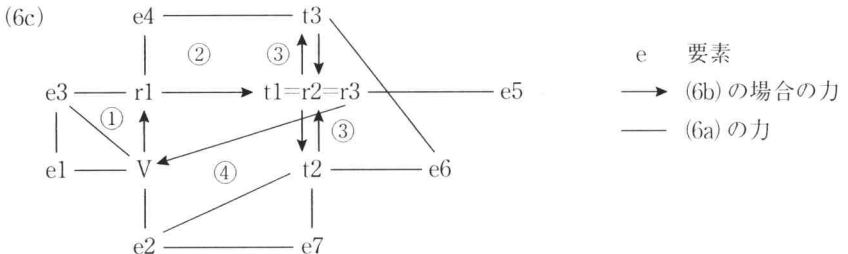
このように捉えるとき、従来対立しているかのように捉えられていたアルチュセールのイデオロギーの重層的決定のダイナミックな力学的モデル（6a）と、「諸個人が彼らの存在の現実的諸条件に対してもつ想像上の関係の《表象》⁽⁹⁸⁾」としてイデオロギーを規定するシステムティックな呼びかけモデル（6b）とをつなぐモデル（6c）を作ることができるだろう。

(6b) ①主体としての《諸個人》への呼びかけ。

②諸個人の**主体**への服従。

③諸主体と**主体**の間の、そして諸主体間の相互の再認と、結局は主体自身による主体の再認。

④こうしてすべては上首尾で、諸主体が何者であるかを再認し、それに応じて行動しさえすれば、将来も上首尾であろう、《かくあれかし!》、となるための絶対的保証⁽⁹⁹⁾



(6c) では、便宜上、(6b) の力線、特に④を一方方向としてのみ図式化したがる、実際には反発する場合もあり、また①②③④の回路は単一ではなく、他の要素との間で複数の展開される。この (6c) のモデルは、認知物語論が到達した認知主体やネットワークの諸項が社会的・言語的な相互交渉の中で構築されるというコミュニケーションの背景に関する見解とも呼応する。

以上、本稿は、歴史的・社会的・政治的な現象・出来事への言語論的転回に基づくアプローチの比喩観、物語性、脱構築性・イデオロギー論の批判的検討を行った。それらの基盤となる隠喩と換喩の対立という比喩観の欠陥、還元主義に対する警鐘と概念図式の自覚、脱構築的な把握に対して関係の濃淡を持つ参照点推論構造ないしはネットワークモデルという代案を提示することで、本稿は、認知物語論に基づくコミュニケーション観の有効射程を拡張することができた。

- (1) テキストは認知現象であり、故にテキストとして現象する前段階にはスキーマ、フレームが作動し、テキストにはスキーマ、フレームが反映すると考える。
- (2) レイコフ&ターナー『詩と認知』(紀伊国屋書店1994・10) 参照。
- (3) Turner, M. 1996. *The Literary Mind*, Oxford University Press.
- (4) また、融合理論は、寓意やイデオロギーといった物語世界を構成する高次物語内容の生成・理解にも適用される。
- (5) 『一般言語学』(みすず書房1973・3) 43頁。
- (6) 中村三春「〈統合〉のレトリックを読む」(『宮沢賢治』若草書房1998・11) 180頁。中村氏の比喩の区分と本稿の比喩の区分とは異なる。
- (7) ラマーン・セルデン『ガイドブック現代文学理論』(大修館書店1989・7) 119頁参照。
- (8) 瀬戸賢一『メタファー思考』(講談社現代新書1995・4) 161～5頁参照。
- (9) 『夢判断』(新潮文庫1992・12) 参照。
- (10) 「コカイン」から「記念論文集」や「眼科医」・「会話」「報酬」に至る例、「植物学」から「花」を経て「妻」に至る例。
- (11) 『一般言語学』258頁。
- (12) 瀬戸賢一『認識のレトリック』(海鳴社1997・9) 210～8頁参照。
- (13) 瀬戸賢一『認識のレトリック』二一八頁。瀬戸氏は比喩を隠喩・換喩・提喩の三つ組で捉えるが、本稿では隠喩と換喩の一組で整理する。というのは、瀬戸氏は『認識のレトリック』一九六頁でメトニミーとシネクドキを意味世界/現実世界、隣接関係/包含関係で区分するが、現実もまた意味であり意味が現実であるとするならば、世界の一つとして把握すべきだからだ。
- (14) ホッパー&トラウゴット『文法化』(九州大学出版会2003・12) 108頁。
- (15) 谷口一美『認知意味論の新展開』(研究社2003・8) 158頁。
- (16) 「ナラトロジー論は有効か」(『国文学』1997・5) 参照。
- (17) 小方孝「物語の多重性と拡張文学理論の概念」(『複雑系社会理論の新地平』専修大学出版局2003・3) 144～145頁参照。
- (18) 小方孝「拡張文学理論の試み」(『複雑系社会理論の新地平』) 344頁参照。
- (19) 鄭暎恵『〈民が代〉斉唱』(岩波書店2003・8) 3～4頁。

- (20) 『く民が代〉斉唱』七頁。
- (21) 吉見俊哉『カルチュラル・スタディーズ』（講談社2001・4）8頁。しかし、文化研究とはあらゆる理論と対象を節合して実践へと向かうのだとすれば、それは方法論による確立された手法ではなく対象領域の総合化によって確立された手法であり、早晚、方法論の分化に自覺的たりうるものが要請されるのではないか。
- (22) ワイ・チー・ディモク『階級とジェンダー、そして換喩の歴史』（『階級を再考する』松柏社2001・5）107参照。
- (23) 中村三春「表象テキストと断片性」（『日本近代文学』2000・5）184頁。
- (24) 注23と同じ。
- (25) 『階級を再考する』111頁。
- (26) 金子明雄「テキストと語らう技術」（『テキストへの性愛術』森話社2000・4）37頁。
- (27) 『く民が代〉斉唱』85頁。
- (28) ルイ・アルチュセール『マルクスのために』（平凡社ライブラリー1994・6）163～4頁
- (29) 今まで受け手からの解釈はテキスト論でなされ、文化研究ではいかに受容されるかという過程が問題化された。それに対し、送り手の側からの分析は貧困であった。それに対し、認知物語論は、作者の伝記研究、話者の作者同一視ではなく、送り手が世界をどのように捉え、表現しているかという観点からの分析を提供した。むろん、送り手と受け手の認知過程は同一であるわけではなく、その違いをふまえつつ統一していく必要がある。
- (30) 松木啓子「ディスコースと文化の意味」（『認知コミュニケーション論』大修館書店2004・2）220頁。
- (31) ジョン・R・テイラー『認知言語学のための14章』（紀伊国屋書店1996・11）101頁。
- (32) 『く民が代〉斉唱』八四頁。
- (33) ウンゲラー&シュミット『認知言語学入門』（大修館書店1998・6）159頁。
- (34) 初山洋介・深田智「意味の拡張」（『認知意味論』大修館書店2003・7）98頁参照。
- (35) 西村義樹「換喩と構文現象」（『認知言語学Ⅱ』東京大学出版会2002・9）299頁。
- (36) 『認知言語学のための14章』107頁。
- (37) デイヴィッド・マクラレン『イデオロギー』（昭和堂1992・4）119頁。
- (38) アルチュセール『アルチュセールの〈イデオロギー〉論』（三交社1993・2）66頁。
- (39) 『アルチュセールの〈イデオロギー〉論』九九頁。アルチュセールは呼びかけに応じる事例をとりあげているが、ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル』（青土社一九九九・三）が言うように、主体は呼びかけに応じない場合もある。

付記 本稿は文化史研究会（2004・2・1）での口頭発表「換喩・全体性・イデオロギー」をもとにしている。また、認知物語論の詳細は、小著『認知物語論の基礎的研究（仮題）』（ひつじ書房・未刊）を参照されたい。